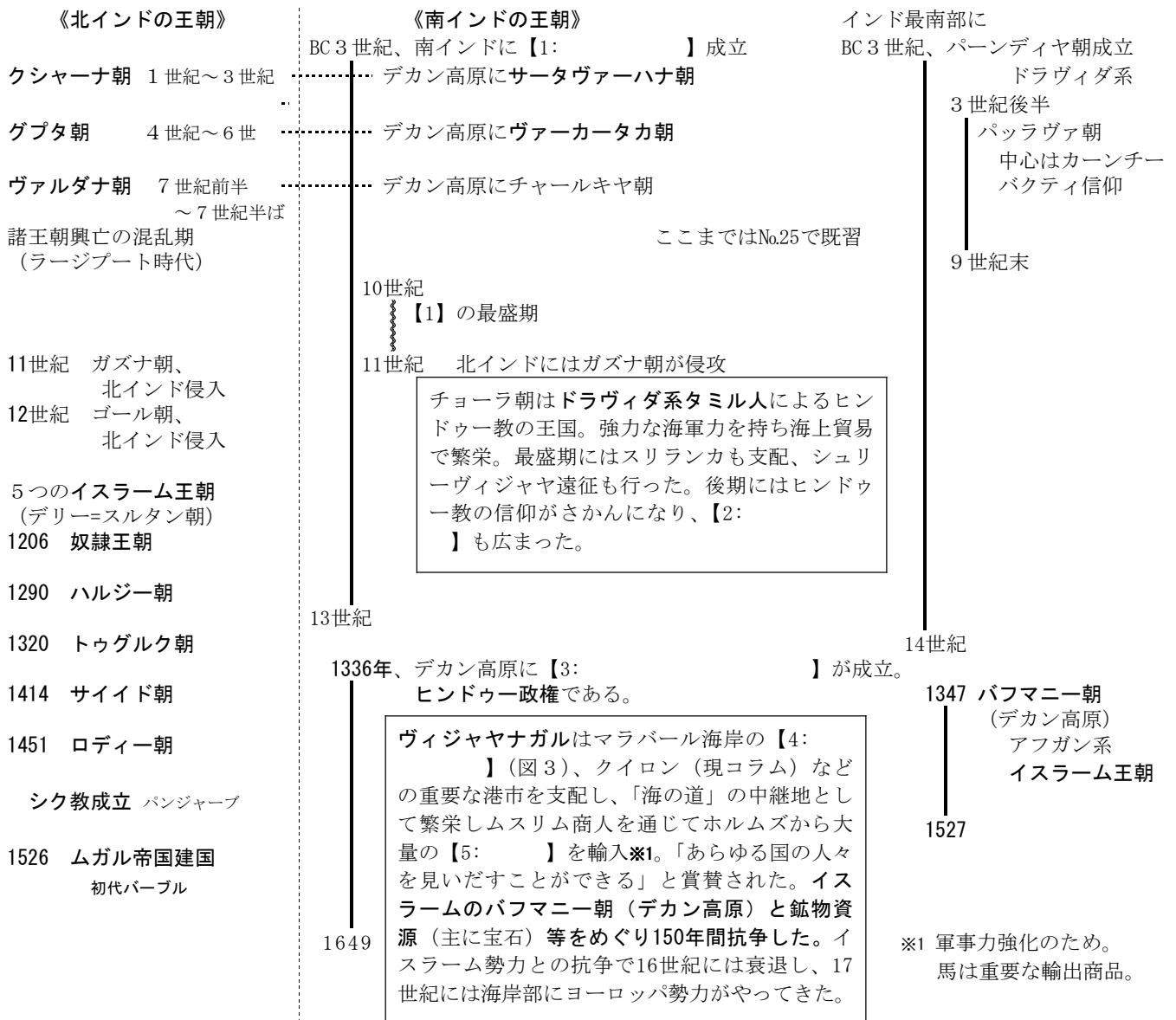


南インドのヒンドゥー王国



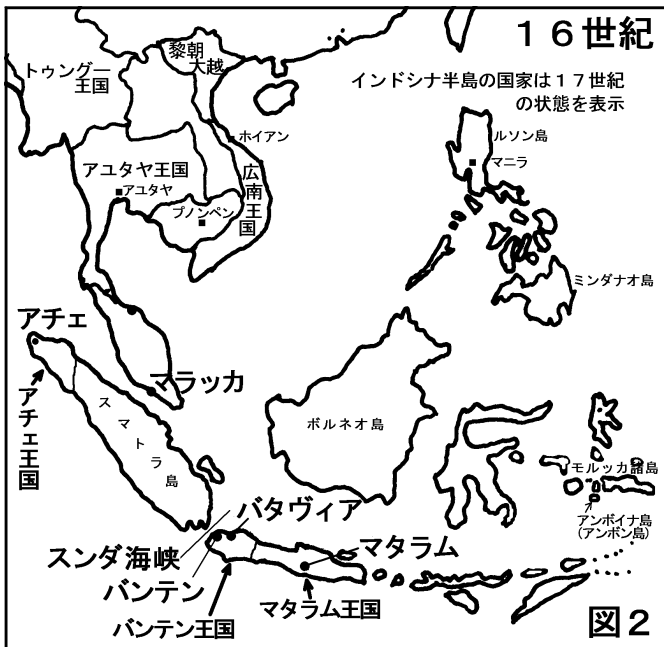
ヨーロッパ人がやってきた

- ヨーロッパ人がアジアにやってきた。
 - 1498年、ポルトガルのヴァスコ＝ダ＝ガマがインド西海岸のカリカット（現コジコード）に達したのが最初とされる。
 - 16世紀、【6: 】はディウ沖海戦（1509）でマムルーク朝（滅亡は1517）を破り、③【7: 】（1510）、④マラッカ（1511）、⑤ホルムズ（1515）を占領するなど傍若無人の行動をとってムスリム商人の商圏を奪い（後掲※2参照）、海のイスラーム＝ネットワークを寸断して自ら香辛料貿易を行おうとしたが、それも一時的なものだった。16世紀後半にはムスリム商人の貿易活動を容認し、「カルタス」（通行手形）購入を強制して通行料を取る政策に転換する。
 - 16世紀にはヨーロッパの強国がアジアに艦隊や商人を送ったが、たとえばムガル帝国は16、17世紀、清朝も17、18世紀は全盛期であり、ヨーロッパ諸国は皇帝の許可を得て商業拠点を確保し、アジアの商慣習に従って善良な商人であるしかなかった。彼らはまだアジアを自分たちの都合のよいように作り変える力を持っていなかった。
 - ア）当時のヨーロッパの銃砲製造技術はまだ基礎的な段階で、アジアの職人がコピーできる程度のものだった。たとえば、1543年、日本に伝来した火縄銃は種子島の鍛冶たちがたちまち複製してしまった。このとき伝わったオリジナルの銃もポルトガル製ではなく東南アジアで複製されたものだったという説もある。
 - イ）当時のヨーロッパの艦船建造技術、航海術は辛うじて大洋横断に耐える程度で、完全武装の軍隊を大量輸送できるものではなかった。
- ヨーロッパ人とアジアで最初に武力闘争したのは【8: 】だった。1514年、サファヴィー朝を破り、1517年にマムルーク朝を滅ぼしたオスマン帝国は、紅海ルートとペルシア湾の出口を確保し、貿易と巡礼ルート確保の一石二鳥をねらってインド洋に出た。1538年には、インド西海岸のポルトガルの拠点【9: 】（ゴアより北にある）を攻撃したが失敗に終わった。16世紀末までオスマン帝国はインド洋でポルトガルと死闘を演じ、スレイマン1世はポルトガルと戦うアチェ王国に武器人員を送り支援した。

3) 前述1)のように、来航したヨーロッパ人は、基本的にアジアの状況に手を加える力はまだなかった。だから、ヨーロッパ人の来航にもかかわらず、ムガル帝国、サファヴィー朝、東南アジア諸国の商人による海上貿易は活発で、海のイスラームネットワークは健在で、内陸とも結びついてアジア経済は「活況の16世紀」とも言うべき活性を呈した。タイの【10: 】やビルマの【11: 】などは特産品（米、鹿皮など）交易で繁栄した。日本は戦国時代である。No.83を参照せよ。ところが、17世紀（特に後半）には、日本、朝鮮の支配者は海上交易への関心を失い、東南アジアの交易依存度の高い国々は甚大なダメージを受けた。全地球的な気温低下（「ミニ氷河期」か？）で東アジアでも飢饉、天災が相次いだ。17世紀ヨーロッパの覇権国家【12: 】も香辛料貿易を独占できたのは17世紀末のことであり、その時点で香辛料価格は、需要の低下と供給過剰により暴落していた。

4) 太字の地名を図2、図3、図4上にポイントせよ。

- | | | | |
|------|--------------------------|------|--------------------------------|
| 1509 | ディウ沖海戦 | 1571 | スペイン、マニラを建設。 |
| 1510 | ポルトガル、ゴア占領 | 1619 | オランダ、 バタヴィア （現ジャカルタ）建設。 |
| 1511 | ポルトガル、 マラッカ 占領 ※2 | 1622 | サファヴィー朝、ポルトガルをホルムズから駆逐。 |
| 1515 | ポルトガル、ホルムズ占領 | 1623 | アンボイナ 事件（現アンボン島） |
| 1517 | オスマン帝国、マムルーク朝を滅ぼす。 | 1639 | イギリス、マドラス（現チェンナイ）に要塞建設。 |
| 1518 | ポルトガル、セイロン占領。 | 1649 | ヴィジャヤナガル滅亡 |
| 1533 | イギリス、ベンガルに植民開始。 | 1658 | オランダ、セイロン島を占領。 |
| 1538 | オスマン帝国、ディウを攻撃（失敗）。 | 1661 | ポルトガル、ボンベイ（現ムンバイ）を英に譲渡。 |
| 1543 | ポルトガル人、種子島に漂着。「鉄砲伝来」 | 1674 | フランス、ポンディシェリを拠点化。 |
| 1557 | ポルトガル、マカオを拠点化。 | | |



16世紀

※2 ポルトガルのマラッカ占領をきっかけに、次のようなことが起き、ポルトガルは、自らが香辛料貿易の当事者になることを諦めざるをえなかった。

①1511年、ポルトガルはたしかにマラッカを占領した。彼らは自ら香辛料貿易を行おうとした。しかし、当分の間、ポルトガルは占領による経済的利益を得ることはできなかった。ムスリム商人がマラッカに来航しなくなったからだ。洋上に逃れたマラッカ王家は、海峡沿いの島に交易拠点を作ってムスリム商人を集め、マラッカを孤立させる作戦に出た。16世紀後半にはムスリム商人の貿易活動を容認し、「カルタス」（通行手形）購入を強制して通行料を取る政策に転換する。

②アチェ王国やマタラム王国などが新たな交易拠点として発展した。ムスリム商人もポルトガルが支配するマラッカ海峡を避け、インド洋からスマトラ島の西岸に沿って航行、【13: 】を抜けて、ジャワ海に入るルートを開拓した。

インドの関連地名を確認しよう。
（フランスの拠点を○で囲め）

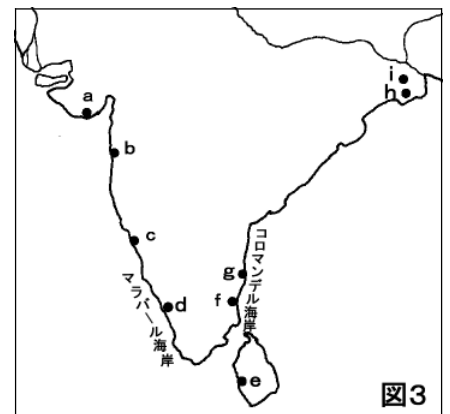


図3

- | | | |
|---|---------|----------|
| a | b | (現ムンバイ) |
| c | d | e |
| f | g | (現チェンナイ) |
| h | (現コルカタ) | i |

5) スペインの時代

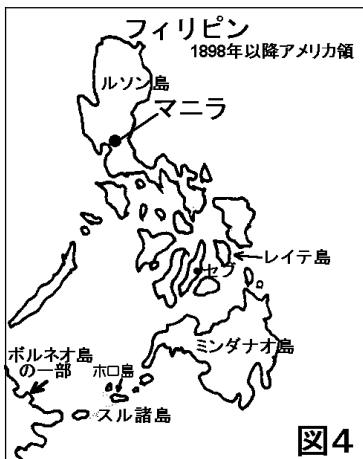


図4

ア) 1521年、スペインのマゼラン艦隊がフィリピンに到達（マゼラン自身は同年マクタン島で戦死）。フィリピンのコンキスタドールと言えばレガスピ。彼の軍隊は1571年にはマニラ市を含む諸島の大部分を征服し、フィリピンはスペインの領土となり、カトリックが強制された。南部のホロ島やミンダナオ島のムスリムはスペイン人に対して頑強に抵抗し、300年以上に渡ってモロ戦争と呼ばれるスペインとイスラーム勢力との間の抗争が続けられた。また、スペイン支配地域でもカトリック化した先住民の反乱が相次いだ。従って南部への侵攻は18世紀と遅く西南ミンダナオ島、スル諸島、南パラワン島では、スル王国をはじめとするイスラーム勢力の抵抗に遭い、最後まで征服できなかった。

イ) スペイン領ルソン島の【14: 】は16世紀以降、【15: 】の中継地であった。ラテンアメリカ産の銀貨（メキシコ銀）と中国産の絹織物や陶磁器、インド産綿布を交換した。メキシコの独立(1821)以降は衰退。主に使われた頑丈な帆船の名称は【16: 】。銀貨に加工されたメキシコ銀は、マカオなどを経由して大量に中国に流入した。日本銀も、「ナマコ銀」の状態で大いに中国に流入した。No.81参照